

困ってほうけれど、嬉しくて仕方ない話
 この春三重支部にご来駕お願いした神戸女学院大の長先生より、多額の郵送料を頂いてしまいました。「百万石」はますます頑張ってしまう。



写真教室出席者の所感集(その2)

(神原さん) — 電話で飄々とした声で —



- 浦さんが一所懸命やってくれているの見て僕はジーンとした。
- 平本君がはいつくはって目を皿のようにして見たり聞いたりしていたのが気に入った。
- やっぱ先生にはほにほに 悪かった。(注 ほにほに → 本当に 本当に) あんなに長い時間にわたって申訳けないことやった。
- ほいでナ、あれだけ見てもらう ウン十万円 出したかったなア。

(服部 博さん) — 仕事場からのでんわ —



あの時は私がJRP入会以来、始めて最高にどたんばに立たされた気がしました。B先生を今まではあまり時間をかけて指導して下さることはなかったけれど、今回は本当に懇切でいいいにわかりやすく教えてくれて本当に勉強になりました。(ここでしばらく沈黙)
 なんでも勉強だと思えます。(またしばらく沈黙)
 これから先、新しいテーマを求めて頑張るつもりですが、今のところ何をとるかよう決めておりません。そのうち皆さんに追いつき、追越しをかけたいと思っています。

(新美君) — お茶を飲みながら —



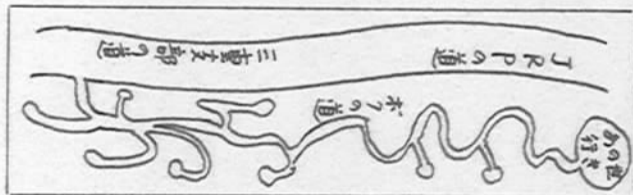
「みんなも喜んだし僕も喜んだ。
 あれだけ充実した教室は始めてだった、少しも眠くなかった。
 よかった。と書いておいて下さい。」

(北村さん) — 400字詰 6枚 —

忘れたい「神原」

さました麦茶を空びんに入れておくと、いつにむくぬらいが不安定で、びんの外を麦茶が流れ落ちる。1日に参加した写真教室の後遺症のひとつにちがいない。体を動かしていないときは、そのことばかり考えてしまう。幸いにも熱を出してくれた珠のおかげで、2日から4日までは子守りに出張していたので、昔の焼酎を飲むような思いは忘れていたのに。帰ってきたら「百万石」の大先生から「薄れしまわぬうちに是非一筆」という情け無用の注文がきている。そういえば永田屋というのは古い酒屋だった。若いころ飲まされた焼酎を思い出すわけだ。こんなことをじきに頭にえがいてしまう。

(誌面の都合で横にしました。原稿では縦で、もっと感じが出ています。)



知也先生と竹内先生とか、ふたりも口をそろえたように言ってくれたことを思い出すと、残念ながらほくは迷路に入っていることを知らずに「少しは写真がうまくなった！」とめてたい錯覚をおこしていたらしいことを寒い心で思わずにいらぬ。

ただ、会場でも大きい声で反論したようにほくは純情に生きてきたつもりだし、愚直さという点でもそうひげをとらぬつもりである。いまはほのかしい愚かなことをやらかしたという悔いは大きいけれど、出品をこたわり、入選を辞退(取消?)して、視察委員会や三重支部の方々のマユをひめさせたのもわからないことほくかなりのハートのなせるわざと思っている。

手紙は古いけれど強い影響をどこかでうけたとすれば、JRP三重支部以外にはなにもないことを確信している。ほくは本当に迷路の中を あめたく口笛吹きながらふらついているのだとすれば、原因の半分は三重支部の方々のせいだし、半分はほくの学び方のまちがいにありと推論できよう。

いつか東さんが「どのようなえらい人の言ってくれることで、決してウダはないように」という意味のアドバイスをしてくれたのに、純情なボクは どうも

本気になってあれもこれもと吸収しようとしたのかもわからない。

知也先生が少々酒くさい息をばきながら、めったやたらに機関銃めいたにきびしいことを、若者めいたに抽象的に言って下さったことは、先生自身も言って下さったように「じっくり」と反すうしてみたいが、いますぐの感想としては 大部分は返上したい気がする。

柳生先輩が横から言ってくれたことを受けて知也先生が「北村さんのリリズム……」とか「青春の再発掘……」と言って下さったことも時々思いかえしてみたいと思っているが、三重支部の方々から「写真が死んでいる」とか「絵にまとめたようにしすぎる」とか「型にはまっている」とか いわれたことからの脱却をほくなりには工夫するために、もともと苦手だったスタッフを一樹先輩のマネを意識してはじめたことだった。動かぬものをうつしてはとて「前頭葉 がないよでシャッターを押す」ことは出来そうになかったからである。

とにかくJRPというのはすごいところだし、うるさいほどに生き方を問われるところらしいことがわかってきた。しまいまでつきあいきれる自信はないけれど、まだまだ逃げ出すわけにはいかない。

竹内さんの言って下さったことの中で、いまのほく程度のものにもゴッソと音のするほどよくわかったことがある。これは半永久的に忘れられないと思う。

「どのように表現していくことが、共同保育所の子どもたちや保育さんたちにプラスになるのか、喜んでもらえるのかということまでよく考えようことが大切だ。」

ほくは始めて「視点」の具体的な意味を教えられた。写真集の「日本の野生馬」についての竹内さんの「視点」によって、さらに復習をさせてもらった。そうしてやっとわかりかけたことがひとつある。「前頭葉がないよでシャッターを押す」ことを身につけるためにはじめて一樹先輩のマネは、今回の写真教室を期にして止めようと思ひかけた。例会で「安易に」ほめてもらったりしたことか、相手をかけた。誰のことか忘れてしまったか「愛するものにしかレンズを向けない。」ということもこれからの自分に課してこうと決心した。ほめられてえげなされても自分の本心を忘れなでやりたい。

知也先生や竹内先生や東さんやいろいろな方が言ってくれたことは一括して忘却の袋の中へ押しこんでしまいたい。いままでのことも、もちろん神原での苦い焼酎の味も。やはりたのしみながら迷路からの脱却をめざしていきたい。めったにランプハウスをあけなくなっただけでもかなりの収穫だということにしておきたい。よく考えてみると例会で認められるために写真をうつしているのではなかったのだ。ひょっとして迷路から出られずにあの世行きとなってもそう悲しいことはない。いままでにJRPのおかげで得たものは充分感謝できるほど大きいと思う。

神原のことは忘れて、本当にうつしたいものをなせうつしたいのかなんのためにうつせうとしているのかを、ちよっとは考えることにして大好きな写真のたのしみでいきたいと思っている。

次の写真教室でまた同じようなことを言われたら頭を叩いてニヤニヤさせてもらおうと思っている。ひょっとして意外に好評だったとしても有頂天になつたりしないだけの心をもつたい。とつくに「不惑」の年は暮らしているのだから。(54, 7, 5)

(陸の字さん) — SOSの絵はがきで —

写真教室の三次会は事務局の喫茶「つ」でにぎやかに。ありがたいことでした。楽しいことでした。そして名残り惜しいことでした。